

柏楨

山門と仏殿(仏様のお堂)との間には7本の大きなイブキの木(学名 *Juniperus chinensis*)が立ち並んでいます。これらの木々は樹齢760年を超えており、建長寺の開山である蘭溪道隆(1213-1278)によって植えられたものだと考えられています。

蘭溪は1246年に禅仏教を教えるために日本へ渡来した中国の禅僧です。蘭溪は最初の5年間を福岡と京都で過ごし、それから新たな禅寺である建長寺の開山となるべく招かれた鎌倉へと向かいました。建長寺は1253年に完成しました。

言い伝えによれば、蘭溪は中国を離れた時にイブキの種を持って行ったといわれています。イブキは生まれ故郷である四川省を原産とする木です。もう中国には戻らないだろうということを知っていた蘭溪は、故郷のことを思い返すために、その種から育った苗木を建長寺に植えたのです。

イブキの木々は何世紀にもわたって見事に成長していき、今では建長寺が建立された時から現存する数少ないもののひとつとなっています。14世紀と15世紀の間に建長寺の大部分を破壊してしまった数々の火災など、イブキの木々はたくさんの自然災害を生き残ってきました。イブキの木々は鎌倉市によって指定保存樹木とされています。

7本のイブキの中でも最も大きいものは高さが13メートルあり、その幹は円周でおよそ6.5メートルあります。こうした建長寺での存在感もあって、イブキの木はお寺ではよく見られる光景となっており、特に禅寺のシンボルとして考えられています。